

ヨハネ 20.3-10 によるイエスの墓に残った亜麻布

ガエタノ・コンプリ神父

私たちは、ヨハネによる福音書 20.3 – 10 によって、イエスの復活後の墓の中の状態を知ることができる。福音書を書いた四人の中で、ヨハネだけが葬りに立ち会い、復活後の墓の中も目撃したので具体的に書くことができたのである。ところが、日本語訳には、以下のような違いがある。

問題になるギリシア語 原文の箇所	フランシスコ会聖書訳	新共同訳	バルバロ訳
<p>keimena ta othonia</p> <p>ta othonia keimena,</p> <p>to sudarion ho en epi tes kephales autou, ou meta ton othonion keimenon, alla koris entetuligmenon eis hena topon.</p>	<p>二人は一緒に走って行ったが、もう一人の弟子の方がペトロより速く走って、先に墓に着いた。そして身をかがめてのぞき込むと、亜麻布が平らになっているのが見えた。しかし、中には入らなかった。後に続いてシモン・ペトロも来て墓の中に入ってよく見ると、亜麻布が平らになっており、イエズスの頭にあった手拭いが、亜麻布と一緒に平らにはなっておらず、元の所に巻いたままになっていた。次いで、先に墓に着いたもう一人の弟子も中に入り、見て信じた。二人は、イエズスが死者の中から必ず復活するという聖書の言葉を、まだ悟っていなかったのである。</p>	<p>二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子のほうが、ペトロより早く走って、先に墓に着いた。身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあるのを見たが、中には入らなかった。続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も中に入って来て、見て、信じた。イエスが死者の中から必ず復活されることを記した聖書の言葉を二人はまだ理解していなかったのである。</p>	<p>二人とも走ったが、もう一人の弟子はペトロよりも早く走って先に墓に着き、身をかがめてそこに置かれている布を見たが、中には入らなかった。シモン・ペトロが続いて来て墓に入り、そこに置かれている布と、頭においてあった汗ふき布を見た。それは布と一緒にはなく、他のところに巻いておいてあった。先に墓に着いたもう一人の弟子も入ってきて、これを見て信じた。彼らはイエズスが死者の中からよみがえると、聖書にあるのをまだ悟らなかった。</p>

ヨハネの文書を見ると、墓の中には二枚の布があった。一枚は「亜麻布」。もう一枚は「手拭いなど」と訳される「スダリオ (sudarion)」である。亜麻布はイエスの遺体を包んだ「聖骸布 (sindon)」である。スダリオは「頭にあった、頭を包んでいた、頭においてあった」と訳されるが、原文には「頭の上にあった」と書かれている。また、亜麻布が「keimena」だったのに、スダリオは「ou keimenon」だったと書かれている。これは「横になる、寝込む」を意味するギリシア語の動詞「keistai」の分詞形である。英語では「to lie」となる。すなわち、亜麻布が「寝込んでいた（横たわっていた）」のに、スダリオは「寝込んでいなかった」、別々の状態にあったことを表している。最後にヨハネは「これを見て、信じた」と言う。信じるためにどのような理由があったのであろう。



亜麻布の状態

1910年のラゲー文語訳聖書には「**keimena ta othonia**」また「**ta othonia keimena**」を「布は横たわりて」と訳されていた。英語では「lying」となる。すなわち「**亜麻布は寝込んでいた、横になっていた**」という意味である。言い換えれば、イエスが抜け出したため、布が「**しぼんだ、平になった**」のである。それは「置いてあった」という他の日本語訳とは異なる。トリノの「聖骸布」(1.43 m × 1.13 m)を見ると、イエスがサンドイッチのように入れられていたことがわかる。そのご遺体が消えたので、フランシスコ会訳が言うように、亜麻布は「平らになった」のである。

スダリオの状態

これに対してスダリオは、原文では「**頭の上にあった手拭い (epi tes kephales)** は、**しぼんでいなかった (ou keimenon)**。しかし**別に (alla koris)**、**畳んだ・丸められた状態で (entetuligmenon)**、**元と同じ場所に (eis hena topon)** あった」のである。

分かりにくい表現であるが、現在スペインにある「オヴィエドのスダリオ」(84 cm × 53 cm)を見れば、その布に大量の血液と黄色の液体がしみ込んでいるのが見られる。そのシミを見れば、布が何に使われたのかが分かる。一時、亡くなったイエスの顎を閉めるために使われたとも言われたが、医師によれば、シミは逆流した肺水腫のシミであるという。つまり、イエスのご遺体を十字架から下ろし、地面に横たえた時、肺に溜まった液体が口と鼻から逆流した。それを受止めるために何重にも折った手拭いを口に当て、さらに頭の下にも回した。そして墓へ運んだ時、片手で口を押さえ、片手で頭を下から支えた。墓に着いた後、要らなくなったその布を丸めて別の所に置いた。そして、岩の上に敷いてあった亜麻布の上にご遺体を横たえ、その上に亜麻布の半分を被せたのである。

生き証人ヨハネの悟り

ヨハネがこれほどの詳しく描写できたのは、その時の光景を目撃したからである。他の福音書には、ただ「亜麻布に包まれた」と書かれている。ヨハネが墓に入った時、空っぽになった亜麻布は平らになっていた。その時、ヨハネには布にしみ込んだ血痕が見えたであろうが、内側にできた御姿の跡は見えなかったはずである。そして、手拭いは、丸められたまま「元と同じ場所」に残っていた。亜麻布の状態は、ヨハネにとってイエスが復活したことのしるしとなり、「それを見て信じた」というのである。

私たちの立場

さて、この二つの布のその後の行方について聖書には何も書かれていない。イエスの死と復活から60年後、ヨハネが福音書を書いた時、これはキリスト信者にとっても大事なことだと思い、これほどの詳しい記録を残したのである。もし布が保存されていなかったなら、このような記述を残す必要はなかったであろう。

今私たちの手に、イエスの葬りの布だと言われる「トリノの聖骸布」と「オヴィエドのスダリオ」が残されている。一般的には、経済的・美術的に価値がない血だらけの布は処分されているはずである。また、もし偽造するなら、よりましなものにするはずである。

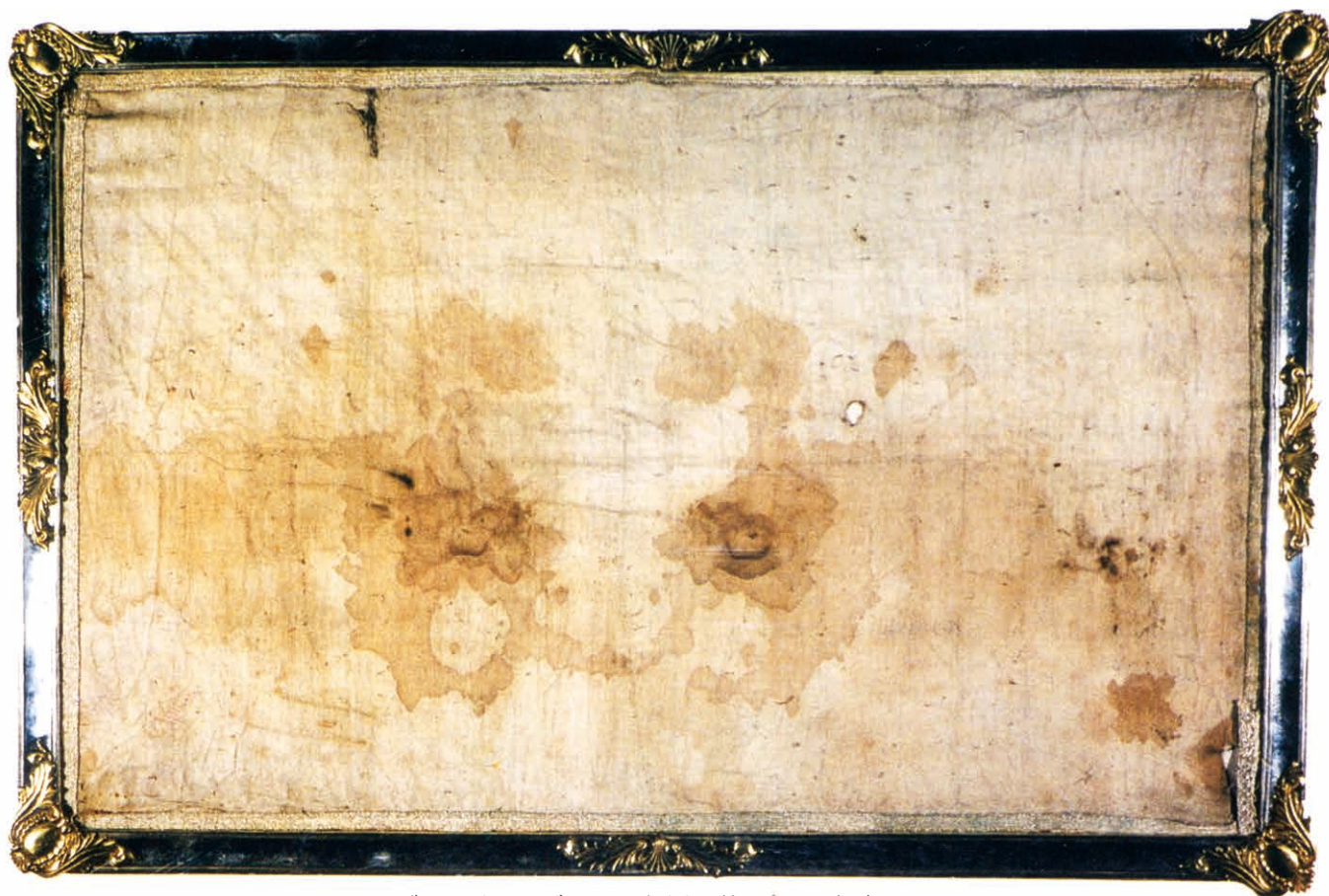
では、なぜこのような物が今まで大事にされ、残されてきたのであろうか。

それは、イエスの血とその御姿が転写されていて、ご受難とご復活の証となるからである。

トリノの聖骸布について言えば、最初の1000年の歴史はほとんど不明であるが、布の上に見られる処刑された人の様子は、まさしく聖書で語られるイエスのおりである。また現代の科学技術では再現することができない「ネガ」の形で残されているその人の姿に、何らかのミステリーが潜んでいると思われるのである。

オヴィエドのスダリオを知る人は少ないが、その歴史は聖骸布より古く 600 年代にさかのぼる。科学的研究は聖骸布より浅いが、どちらの布にも同じ AB 型の血痕があり、さらにどちらにも聖地の花粉が付着している。驚くべきは、次頁の写真のように、二枚の布に残された人の後頭部の傷跡が一致していることである。辿ってきた歴史が異なり、数千キロメートルもの距離を隔てているにもかかわらず、なぜ同じ人物の頭を包んだことを示しているのだろうか。

この二枚の布は、2000 年もの間大切に保存されてきた。イエスを信じる私たちには、信じるための証拠は必要ない。しかし、これらが本物であれば、それは神の大きな恵みであるに違いない。



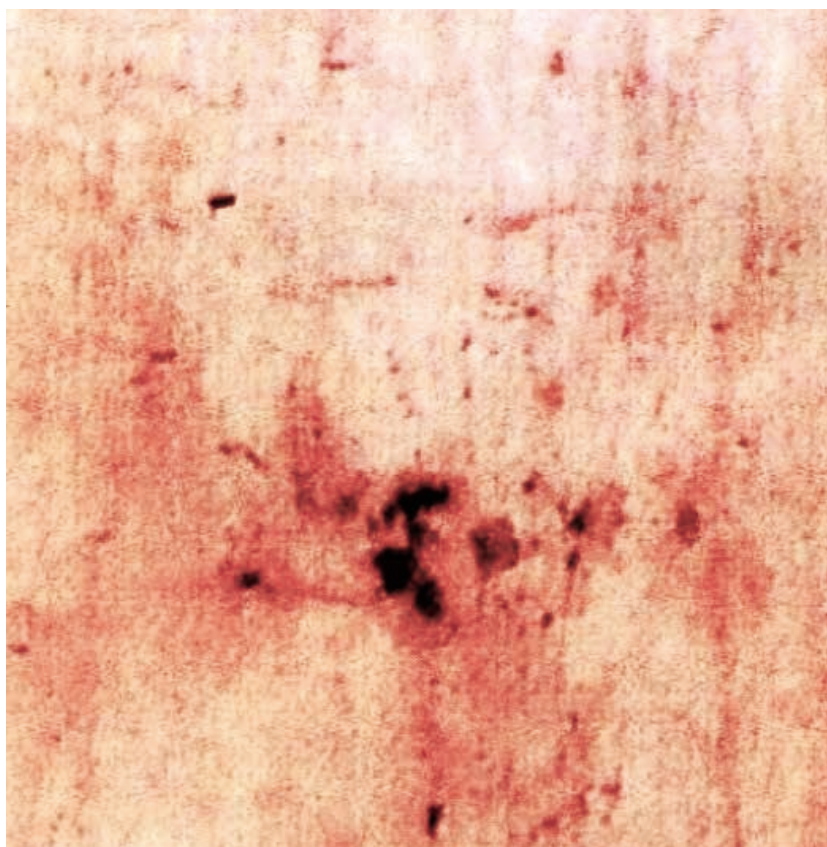
オヴィエドのスダリオ。右側に茨の冠の跡が見られる

オヴィエドのスダリオの歴史

335年	エルサレムの聖墳墓教会が落成され、そこにイエスの聖遺物が保存された
614年	エルサレムがペルシア王コスロエ 2 世に占領され、スダリオはフィリポ司祭によりエジプトのアレクサンドリアに運ばれた
615年	アレクサンドリアもペルシア軍に占領され、スダリオは北アフリカを通過してスペインのカルタゲナへ上陸。その後セヴィリア、またトレドへ運ばれる
718年	トレドがイスラム軍に占領される。スダリオはスペイン北部のオヴィエドへ運ばれる
1075年3月14日	王アルフォンソ 6 世の前でスダリオが検証される
1113年	スダリオは現在の箱に安置される
1965年	イタリアのリッチ師がスダリオを検証して紹介する
1994年10月29～31日	第 1 回スダリオの国際研究会
1998年6月5～7日	第 3 回スダリオの国際研究会



聖骸布の人の後頭部。
茨の冠の跡は、死の数時間後、墓に葬られた時のこと



スダリオの人の後頭部。
茨の冠の跡は、十字架から降ろされた時のこと



これこそ聖骸布
コンプリ神父がその真相を語る
ガエタノ・コンプリ 著
ドン・ボスコ社刊
B5判 並製 107ページ
定価 本体 1,200円 + 税
ISBN978-4-88626-586-9



キリストと聖骸布
ガエタノ・コンプリ 著

イースト・プレス社刊 文庫ぎんが堂
文庫判 並製 304ページ
定価 本体 1,000円 + 税
ISBN978-4-78167036-2

ガエタノ・コンプリ神父

住所：〒182-0033 調布市富士見町3-21-12 サレジオ神学院 電話：070-5590-0890

E-mail：cimatti30@v-cimatti.com HP：http://www.sindon-jp.com YouTube：カトリック入門講座 人間としての哲学講座